

タイトル：2025 年度 中東☆イスラーム教育セミナー（第 21 回）

日時：2025 年 9 月 18 日（木）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

氏名：渡邊琉可（東京外国語大学大学院 総合国際学研究所 博士前期課程）

まず初めに、本セミナーの開催にあたり、会場設営および運営をしてくださった AA 研の関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

私は学部 2 年生のときに、オブザーバーとして本セミナーに参加したことがある。学部生がこのようなセミナーに参加しても良いのかと終始萎縮していた一方、多種多様な学知に触れることができ、大学院進学への思いをより強めた貴重な機会となった。それだけに、3 年経った今回、本セミナーに受講生として正式に参加することができたのは何より嬉しいことであった。一方、周囲の受講者の方々は今や「すごい先輩方」ではなく「切磋琢磨すべき同年代の大学院生」であり、緊張感は前回参加したときよりはるかに高かった。受講生の方々が興味深い発表を行った中、発表を見送ってしまったのは、やはり悔いが残る。

非発表者である私が本セミナーの感想を書くにあたり、ここでは、私個人が本セミナーをどのように捉えているかを述べることにする。

私は現在、東京外国語大学大学院で 20 世紀初頭の中央ユーラシアの改革派知識人の活動について、フェルガナというひとつの地理領域と結び付けながら研究している。今回私は、研究領域である中央ユーラシア地域をより広汎な地域の中にあるものとして捉え、自らの知見を広げる目的で、本セミナーに参加した。本セミナーで取り扱われる諸言語の多くに、*musāfir*（旅人）という語彙がある。語源はアラビア語であり、*safar*（旅）と同語根である。本セミナーで対象としている地域は、歴史的に人々やモノ、価値観などといったものの移動、交流、折衝によって、計り知れないほどの価値を生み出してきたし、今後もそうであり続けるだろう。本セミナーは、これを大学内に疑似的に再現する試みではないだろうか。参加者が *musāfir* として時空間や学問領域を超越して学び、自らの研究を深めることができる、それが本セミナーの特色であると強く感じた。そしてこれは、私の研究する中央アジアの改革派知識人とも無縁ではない。彼らは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、オスマン帝国内の諸地域やヨーロッパ、南アジア、さらには日本を含めた東アジアを旅し、自らの知見を深めたことが分かっている。私にとって本セミナーへの参加は、ある意味では彼らの追体験ともいえるべき行為でもあり、単なるセミナー以上の意味を有しているのである。

発表やセミナー以外の時間にも、研究やその他のことで先生方や他の受講生の方々と活発な議論を行うことができたことは、私の研究に直接的ないし間接的に多大な影響をもたらした。自らの研究に関して、私はこの4日間ずっと悩みに悩んでいたが、本セミナーのおかげで今後の研究方針をわずかながら定めることができた。

末筆になるが、本セミナーに携わったAA研の関係者の皆様、先生方、受講者の皆様全てに深謝する。来年以降も本セミナーに参加し、今度は発表者としてご指導ご鞭撻を頂きたい。